

教職課程学生を対象としたグループワークの実践報告 4

一生徒の人間関係トラブルについて考えるグループワークー

塩谷 隼平

要旨

本稿では、教職課程の学生が、生徒の人間関係のトラブルへの対応について体験的に学ぶために作成したグループワークであるエクササイズ「マリアのきもち」を紹介する。本エクササイズは、架空の高校の部活動でおきた人間関係のトラブルの解決方法についてグループで話し合い、様々な意見を共有することを通して、支援の基本姿勢について学ぶことができる。学校での人間関係のトラブルに対応するうえで、個人の資質に原因をもとめて指導するのではなく、システム論的な視点から眺めることによって、起きている問題の理解が深まり、対応の幅が広がることについて学習できる。また、生徒のトラブルに対応するために、教職員仲間で協働し、他の専門職や地域の機関とも連携する必要性についての理解を深めることができる。

I はじめに

1. 教員に求められる生徒指導

学校における生徒同士の人間関係のなかで、子どもたちは社会性を発展させていく。そのため、教員には学習指導だけでなく、生徒の社会性を育むための生徒指導も求められる。文部科学省（2010）は、生徒指導を「一人一人の児童生徒の人格を尊重し、個性の伸長を図りながら、社会的資質や行動力を高めることを目指して行われる教育活動」と定義し、その目的を「すべての児童生徒のそれぞれの人格のよりよき発達を目指すとともに、学校生活がすべての児童生徒にとって有意義で興味深く、充実したものになることを目指す」と設定している。そして、「生徒指導は学校の教育目標を達成する上で重要な機能を果たすものであり、学習指導と並んで学校教育において重要な意義を持つもの」として、生徒指導の重要性を説明している。

授業で勉強を教えるだけで教員の仕事が完結することはなく、いじめ問題や生徒同士のけんかなど、児童生徒が起こす大小さまざまな人間関係のトラブルに介入して、生徒に寄り添い、問題解決のために対応しなければならない。よって教職課程の学生においても、学習指導のための学修だけではなく、生徒指導のための学びも重要となる。生徒指導の実際の方法は、教育現場に入ってから出会う多くの生徒たちとの日々のやりとりを通して、

また、先輩教員の背中をみながら経験知として積み上げられ、それぞれにあった指導方法を研鑽していくことになると思われる。しかし、教職課程における教育において、そのための素地を養っておくことは必要不可欠である。

2. システム論からみた人間関係のトラブル

学校でいじめが生じると、「いじめられた生徒が気弱だから暴力をふるわれた」とか、「いじめた生徒の家庭環境が悪くストレスのはけ口として暴力をふるった」などのように、生徒個人のパーソナリティの特性や家庭環境にその原因を求めて理解され、その個人に行動の変容を求める指導がおこなわれることも多いのではないだろうか。しかし、この視点だけで解決方法を探ってもうまくいかない。そこで役立つのがシステム論である。システム論とは、組織や集団を有機体としてとらえて人と人との相互関係を理解する認識論である。臨床心理学の領域では家族療法を中心に取り入れられてきた。システム論では、人間関係で生じる問題を個人の資質からではなく、システムにおける相互作用や全体性の問題として理解していく。

吉川ら（1999）は、学校臨床にシステム論を導入し、学校をシステムという視点でとらえ、そこで起こる問題を学校システム内の相互作用の問題や、コミュニケーションの問題としてとらえることで理解や問題解決に役立つとしている。また、田中（2009）は、いじめ問題をシステム論的なアプローチで考察し、集団の閉鎖性の緩和が問題解決のカギであるとしている。石戸（2016）も、同じくいじめをシステム論の視点から分析し、コミュニケーション・システムの病理として理解し、いじめられる子どもを再包摂するネットワークの形成が重要であると述べている。

以上のように、学校でおこる人間関係のトラブルの原因を、個人の資質だけに求めずに、システム論的に理解することで、視野が広がり、問題解決の糸口がみつかる可能性が高まる。システム論はクラスやクラブ活動という集団をあつかう教師にとって大きな助けになると考えられる。

3. 目的

生徒が抱える人間関係のトラブルの解決方法にたった一つの正解のようなものではなく、そのときどきの状況や人間関係の在り方によって大きく異なる。そのため、その学習方法においては、学習者同士の多様な意見に触れあうことのできるグループワーク形式も適している。本稿では、教職課程の学生が、生徒の人間関係のトラブルの理解と支援方法について学ぶためのグループワークであるエクササイズ「マリアのきもち」について報告する。

Ⅱ エクササイズ「マリアのきもち」について

1. エクササイズの背景

エクササイズ「マリアのきもち」は、エクササイズ「青山玲子さんのケース」（星野、2003）を参考にして筆者が創作したグループワークである。「青山玲子さんのケース」は、架空の職場での人間関係のトラブルの事例を読んで、登場人物の心理的背景や問題の解決策を考え、グループでの話し合いを通して、心理的背景に目を向けることや、共感的に理解することの重要性について学ぶことができるグループワークである。エクササイズ「マリアのきもち」は、設定を架空の高校の部活動にすることで、教職課程の学生が生徒の人間関係のトラブルの対応について学べるように改変した。高校の部活動での人間関係のトラブルという大学生にとって身近なテーマにすることで、課題に取り組みやすくグループで話しあいやすくなっている。

また、部活動をフットサル部に設定したことに大きな意図はなく、学習者の個人的な体験から距離をとるために実際にはあまり存在しない運動部として選んだ。なお、フットサルとは5人対5人でおこなうミニサッカーのようなスポーツである。

2. エクササイズの実施方法

エクササイズ「マリアのきもち」の実施方法の詳細と90分で実施する場合の時間配分の目安を表1に示した。使用する道具は、印刷した図1～4の資料の他は、筆記用具である。

2-1. ねらいの説明と課題の配布

まず、エクササイズのねらいとして「生徒の人間関係のトラブルを理解して、解決方法を考える」などと提示する。次に資料（図1、2）を配布する。

2-2. 個人で課題①に取り組む

個人で課題①「このケースに登場する人物の心理について考えてください。それぞれどんな想いをもち、お互いに対してどんな感情や気持ちを抱いているでしょうか？下の図に矢印や、吹き出しなどをつかって図示してください。正解や正しい答えはありません。自由に想像力を膨らませてください。」に取り組んでもらう。その際、矢印の描き方などはメンバーの自由にさせる。また、「学園長」などこの事例にまつわる他の登場人物を描き足したいなどの要望があれば、「自由に描き足してください」と指示する。事例に書かれていないことについては、自分で自由に想像してよいことを伝えてもよい。この時点では、他のメンバーと相談せず、自分なりに考えることを促す。課題①の作業時間はメンバーの進捗状況を見ながら調整してよい。

2-3. グループに分かれて課題②に取り組む

4人くらいのグループに分かれる。まず、順番を決めて、それぞれの取り組んだ課題①の結果を他のメンバーに見せながら説明する。全員の発表が終わったら、A3サイズに拡大して印刷した課題②のプリント(図3)を配布して、グループで課題②「この問題を解決するために、教職員はどのように支援していけばよいでしょうか?」について、グループで話し合ってもらい、提案された解決方法を配布した用紙に書いてもらう。

2-4. グループ間でのシェアリング

複数のグループがある場合は、順番に課題②の結果について発表する。グループ数が多い場合や、発表する時間がとれない場合は、グループごとに記入した課題②の用紙をみえるように提示し、お互いにみてまわる。

2-5. ふりかえり&わかちあい

ふりかえり用紙(図4)を配布して、個人で記入する。その後、ふりかえり用紙に記入したことをグループ内で発表してシェアリングをおこなう。

2-6. 小講義

必要があればプリントなどを作成して配布し、「表面的な現象だけ見て、悪者探しをして、個人の資質だけに原因を求めて、その人を責めてもよい対応にはつながらない」「その出来事に絡んでいる人たちのそれぞれの気持ち(心理的背景)に目を向け、それぞれの視点から、その出来事がどのように見えているかについて共感的に理解する必要がある」など、生徒の人間関係のトラブルに対応する際の基本姿勢などについて説明する。

表1 エクササイズ「マリアのきもち」実施方法 (90分)

時間	実施する内容
0～5	1. ねらいの説明と課題の配布 (5分) <ul style="list-style-type: none"> ・ ねらい「生徒の人間関係のトラブルを理解して、解決方法を考える」 ・ 資料 (図 1、2) を配布する
5～20	2. 個人で課題①に取り組む (15分) <ul style="list-style-type: none"> ・ 「マリアのきもち」の事例 (図 1) を読んで、課題①に個人で取り組む
20～50	3. グループに分かれて課題②に取り組む (30分) <ul style="list-style-type: none"> ・ 4人くらいのグループに分かれる ・ まず、順番にお互いの課題①を発表する ・ 発表が終わったら、資料 (図 3) を配布して、グループで課題②に取り組む
50～60	4. グループ間でのシェアリング (10分) <ul style="list-style-type: none"> ・ 複数のグループがある場合は、順番に課題②の結果について発表する ・ グループ数が多い場合や、発表する時間がない場合は、記入した課題②の用紙を机に置き、お互いにみてまわる
60～75	5. ふりかえり&わかちあい (15分) <ul style="list-style-type: none"> ・ ふりかえり用紙 (図 4) を配布して、個人で記入する ・ ふりかえり用紙に記入したことをグループ内で発表してシェアリングをおこなう
75～90	6. 小講義 (15分) <ul style="list-style-type: none"> ・ 表面的な現象だけ見て、悪者探しをして、個人の資質だけに原因を求めて、その人を責めてもよい対応にはつながらない ・ その出来事に絡んでいる人たちのそれぞれの気持ち (心理的背景) に目を向け、それぞれの視点から、その出来事がどのように見えているかについて共感的に理解する必要がある

エクササイズ「マリアのきもち」

マリアは私立エリザベス女子高校に通う1年生の生徒です。学校で最も力をいれているフットサル部に所属しており、スポーツ万能で、誰とでも気軽に仲よくでき、とても明るくて、活発な女子高校生です。

夏休みのある日の練習の後、所属しているフットサル部である出来事が起きました。キャプテンである2年生のステファニーに呼び出され、マリアの練習中の態度や服装、先輩への言葉づかいのことで厳しく注意されました。マリアとしては態度や服装にも充分気をつけてきたつもりでしたが、部の伝統や雰囲気重んじるステファニーからすると、マリアの言動が軽く見えてしまったのです。マリアが呼び出されたことは他の部員も知っていましたが、マリアに声をかける人はいませんでした。

3年生が引退したフットサル部は、現在、ステファニーを含む4名の2年生、マリアを含む6名の1年生の10名で構成されています。ステファニーはまじめな努力家で、キャプテンとして2年生のメンバーからも信頼され、先輩の面倒見もよく、ときには自分の練習時間を削ってまで後輩の練習につきあうこともありました。

マリアは、幼い頃からフットサルをしており、中学校時代の彼女の活躍を知る学園長が声をかけ、特別推薦枠をつかってエリザベス女子高校に入学しました。フットサル部の監督は体育大学出身の若い男性教師であるマイケル先生が勤めています。マイケル監督も期待の新人ということで、マリアの実力を伸ばすために、マリアだけ別の練習メニューを課すなど、他の部員と区別して扱いました。そして、マリアも監督の期待に応えるべく、朝一番に学校に来て、筋力トレーニングをするなど一生懸命に練習しました。

ステファニーに注意されてから、マリアは今まで以上に態度や言葉づかいに気を使い、他の部員の目を気にするなど、細かなことにも神経を尖らせるようになりましたが、だんだんと部活に行くことが憂うつになってきました。それでも練習に打ち込む努力はしましたが、ことあるごとにステファニーにあれこれ言われ、気が休まる気がしません。

マリアは監督や他の部員に相談しようと何度も考えましたが、周囲の迷惑になるように感じ、一人で悩む日々が続きました。11月になると、気分の落ち込みがひどくなり、いくら寝ても疲れが取れず、食欲も減りました。部活にはなんとか参加していましたが、あれだけ好きだったフットサルに楽しみを感じられず、ただ練習をこなしているだけでした。

その年の12月の終わり、マリアはマイケル監督に退部を申し出ました。特別推薦枠で入学したマリアはフットサル部をやめれば高校も退学になってしまいます。

塩谷 隼平（東洋学園大学）

図1 エクササイズ「マリアのきもち」事例

課題①

このケースに登場する人物の心理について考えてください。それぞれどんな想いをもち、お互いに対してどんな感情や気持ちを抱いているでしょうか？下の図に矢印（→）や、吹き出し（☞）などをつかって図示してください。

正解や正しい答えはありません。自由に想像力を膨らませてください。

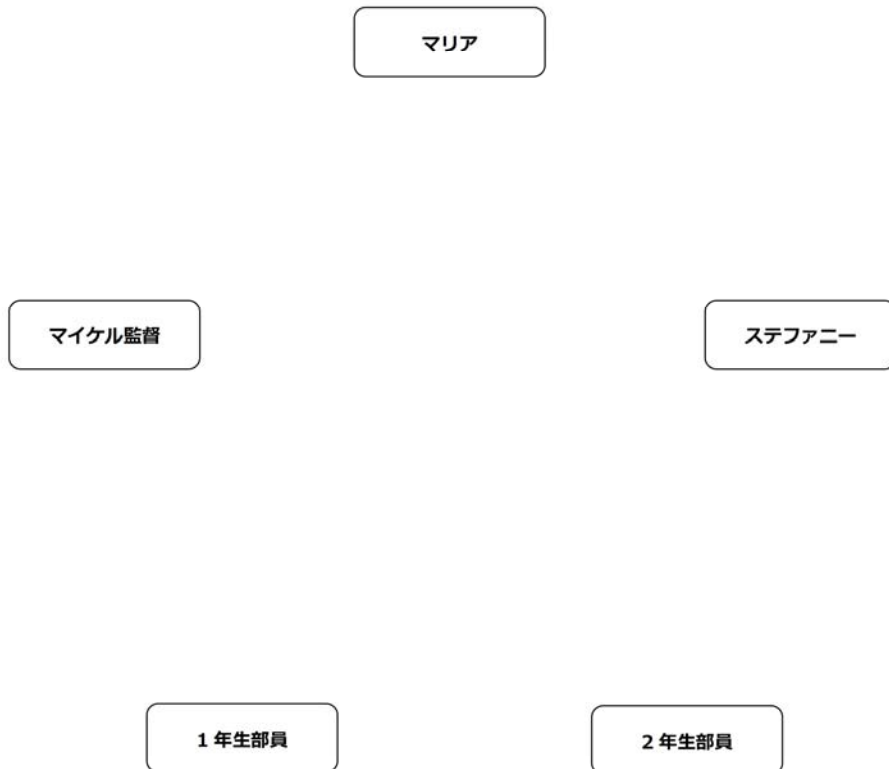


図2 エクササイズ「マリアのきもち」課題①

課題②

この問題を解決するために、教職員はどのように支援していけばよいでしょうか？
グループで話し合っこのケースの支援方法を考えてください。

図3 エクササイズ「マリアのきもち」課題②

Ⅲ エクササイズ「マリアのきもち」の実践報告

1. 課題①の回答例

大学の授業で実施した際に、課題①について出された意見の例を図5に示した。エクササイズのタイトルが「マリアのきもち」であり、エピソードがマリアを中心に描かれていることもあり、この事例を「才能あるマリアに嫉妬した先輩のステファニーが後輩にいじめをおこなっている」とステファニーを悪者としてとらえ、かわいそうなマリアに同情した意見が出ることも少なくない。しかし、同時に「ステファニーはキャプテンとしての責任感やマリアへの期待から厳しくアドバイスしている」とステファニーの立場を擁護する意見や、「フットサルが得意なマリアが無意識に調子に乗っていた」というようなマリア側にも非があったという意見がでることもある。

また、「マリアを特別扱いしているマイケル監督が悪い」とマイケル監督をトラブルの根源のようにとらえる意見がでると同時に、「マイケル監督は学園長の期待に応えるのに必死」「思春期女子の心理の理解は難しい」とマイケル監督の立場を慮る意見がでることもある。

課題①に正解はない。ここで学んでほしいことは、起きている現象は一つでも、それを誰の視点からみるかによって、解釈の仕方が何通りもあるという事実である。「実はステファニーはマイケル監督に恋愛感情を抱いており、マリアを恋敵と認識してきつく当たっている」という見方だって間違いではない。

2. 課題①から学べること

人間関係のトラブルを目の前にすると、我々はどうしても「誰が悪いのか」という悪者探しを始めてしまう。しかし、事態はそんなに単純ではないことも多い。この事例をステファニーがマリアをいじめているケースとして理解し、ステファニーだけを責めるような指導をしたら、ステファニーの本当の気持ちを受け止めることができず、今度はステファニーが大きく傷ついてしまう可能性もある。教員にとって、マリアだけでなく、ステファニーも守らなければならない大切な生徒である。生徒たちのトラブルに介入する際に、表面的な現象や、一方の意見だけを聞いて決めつけてかかると生徒の真意や本当に起きていることを見誤ってしまう。

システム論では、Aという「原因」によって、Bという「結果」が生じる直線的因果律ではなく、AはBの「原因」であると同時に、BによってAという「結果」が生じるという円環的因果律の考え方を採用している。今回のケースでも、ステファニーがマリアを厳しく指導するから、マリアが練習に身が入らなくなり、また、マリアが練習に身が入っていないので、ステファニーが厳しく指導するという円環的な関係になっていると解釈できる。

人間関係のトラブルは、コミュニケーションの連鎖であり、この円環的因果律が理解を助けてくれる。

人間関係のトラブルにおいて「悪者」を見つけて、その人を責めるような対応をしても問題は解決しない。教育の場である学校ではなおさらである。課題①では、グループ内で様々な意見に触れることで、支援の基本姿勢について気づいてほしい。

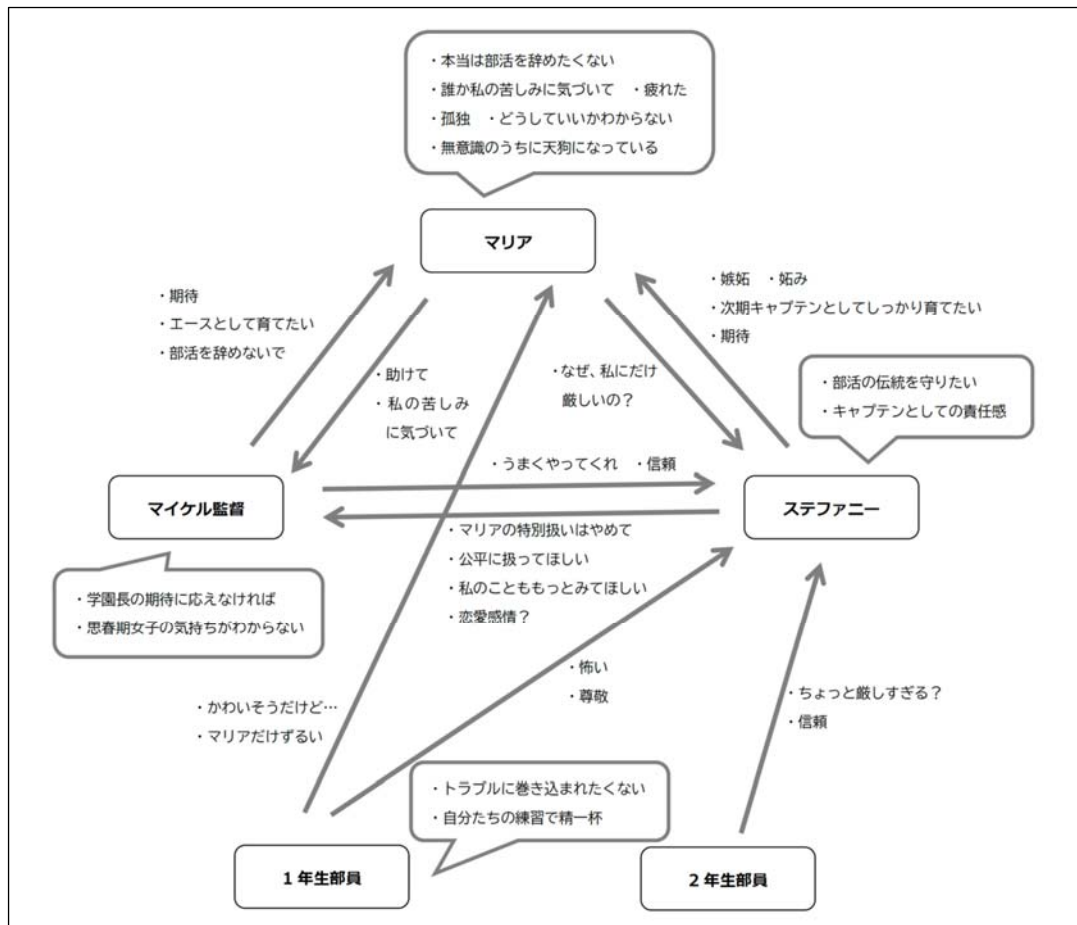


図5 課題①の参考例

2. 課題②について

このエクササイズでは課題②の具体的な回答例などは示さなくてもよい。グループから出された意見について、その内容が明確になるような質問をすることはあるが、よい悪い

の評価はほとんどしない。エクササイズ「マリアのきもち」で重視しているのは、よい解決策を決定することではなく、解決策を考えるうえで、その現象の背後にあるそれぞれの心理や感情について思いを馳せることである。そうすることで、視野が広がり、対応方法の幅が広がる。そして、生徒の人間関係のトラブルに実際に対応するようになったときに、一方的に決めつけた指導をするのではなく、まずは、それぞれの生徒の想いを聞いてみるという姿勢が生まれることを期待している。「何が起きているかわからないから、あなたの気持ちや考えていることを教えてほしい」という姿勢が解決の糸口になるはずである。

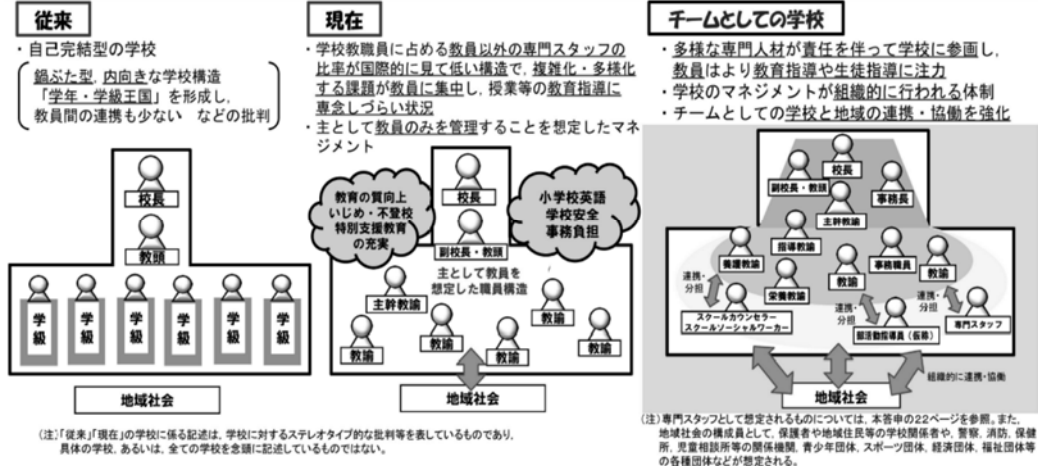
3. 「チームとしての学校」という視点で

生徒の人間関係のトラブルへの対応を考えるうえで大切になるのが「チームとしての学校」という視点である（図 6）。フットサル部で起きていることは、顧問のマイケル先生一人で解決すべきだという視点で対応を考えると行き詰まってしまう。マリアの周囲にはクラス担任をはじめ他の教員もいる。それらの教員仲間と連携して対応にあたるのが対応の幅を広げてくれる。

精神医学的な視点で見ると、マリアは不眠や食欲の低下、楽しみの喪失などを抱えており、うつ病の症状を呈していると考えられることもできる。そうすると教員の対応だけでは不十分で、医療的な支援につなげる必要がでてくる。そのためにはスクールカウンセラーや養護教諭と連携しながら、外部の医療機関ともつなげて支援を展開していかなければならない。

教職員が協働し、学校が地域社会に開かれ、外部機関と連携しながら生徒を支援していく体制が大切である。

「チームとしての学校」像（イメージ図）



授業	・教員による一方的な授業への偏重	・変化する社会の中で、新しい時代に必要な資質・能力を身に付ける必要	・アクティブ・ラーニングの視点からの不断の授業改善
教員の業務	・学習指導、生徒指導等が中心	・学習指導、生徒指導等に加え、複雑化・多様化する課題が教員に集中し、授業等の教育指導に専念しづらい状況。	・専門スタッフ等との協働により複雑化・多様化する課題に対応しつつ、教員は教育指導により専念
学校組織運営体制	・鍋ぶた型の教職員構造 ・担任が「学年・学級王国」を形成	・主幹教諭の導入等の工夫 ・学校教職員に占める教員以外の専門スタッフの比率が国際的に見て低い構造	・カリキュラム・マネジメントを推進 ・多様な専門スタッフが責任を伴って学校組織に参画して校務を運営
管理職像	・教員の延長線上としての校長	・主として教員のみを管理することを想定したマネジメント	・多様な専門スタッフを含めた学校組織全体を効果的に運営するためのマネジメントが必要
地域との連携	・地域に対して閉鎖的な学校	・地域に関わられた学校の推進	・コミュニティ・スクールの仕組みを活用 ・チームとしての学校と地域の連携体制を整備

図6 「チームとしての学校」像

(出所) 文部科学省 (2015) 「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について (答申)」

4. 他の授業での応用

今回は、教職課程の学生を対象にしたグループワークとして紹介したが、課題②を「この問題を解決するには、スクールカウンセラーとして、教職員とどのように連携をとって支援していけばよいのでしょうか? グループで話し合っこのケースの支援方針を考えてください。」と変更することによって、スクールカウンセリングの授業で実施することもできる。学校臨床におけるコンサルテーションを学ぶためのよい教材になるだろう。その他、対人援助について学ぶ学生の体験的な学習の教材として活用してもらえればうれしく思う。

文献

星野欣生 (2003) 『人間関係づくりトレーニング』金子書房

- 石戸教嗣（2016）『システムとしてのいじめ：ネットワークの視点からみた教育方法の再検討』 川口短期大学紀要（30） 99-113
- 文部科学省（2010）『生徒指導提要』
- 文部科学省（2015）『チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について（答申）』
- 田中美子（2009）『いじめ発生及び深刻化のシステム論的考察』 千葉商大論叢 47（1） 31-63
- 吉川悟 編（1999）『システム論からみた学校臨床』 金剛出版